WEBで読む「建設通信新聞」

建設通信新聞Digital
⇨http://kensetsunews.com

ＰＣで「建設通信新聞」記事検索・メール配信
日経テレコン21／Factiva／G-Search／NewsWatch

工事情報の検索なら「建設工事の動きDigital」
⇨https://ugoki.kensetsunews.com/

THE KENSETSU TSUSHIN SHIMBUN

建設通信新聞

Architectures,Constructions & Engineerings News(Daily)

２０２３年（令和５年）４月２６日（水曜日）　（第三種郵便物認可）

日本建築学会シンポジウム「和室とは何か？－それは未来に失われてしまうのか？－」

和室の再発見と新生への道を探る

ユネスコの無形文化遺産に

「現代・和室の会」の設立へ

「和室とは何か？　それは未来に失われてしまうのか？」。そのような問い掛けのシンポジウムが東京都港区の建築会館ホールで開かれた。主催は日本建築学会建築計画委員会「日本建築和室の世界遺産的価値ＷＧ（ワーキンググループ）」（主査・松村秀一早大理工学術院総合研究所・研究院教授）。近年、住宅建築の中で和室の採用率が急減している現実を前に、「和室の再発見と新生への道」を探るのが主な目的だ。松村主査は「日本の生活文化や精神文化と和室の長く深い関わりを再認識していただき、住み手と建築生産システム関係者などが団結してユネスコ無形文化遺産にできればうれしい」と呼び掛けた。ＷＧ幹事の服部岑生千葉大名誉教授は「和室が減少する状況で、心の中に培われた和室の意味をどのように残すかが課題だ」と指摘した。

服部氏

藤田氏

松村氏

シンポジウムは亀井靖子日大准教授が司会を務め、初めに松村氏が主題を解説した。この後、藤田盟児奈良女子大工学部長が「日本人と和室―人の振る舞いから考える」をテーマに基調講演した。松村氏は、ＷＧの前身である「日本建築和室の世界遺産的価値特別調査委員会」が設置された２０１６年の２年前に、元放送大学副学長の故本間博文氏と千葉大名誉教授の服部岑生氏が「このままでは日本の住まいから和室は姿を消してしまうのではないか」という危機感を持っていたとし、既にこの時点で準備会として活動がスタートしていたと説明した。

さらに、建築学会内で関心が高まりメンバーが増え続けていったと話した。その理由については「必ずしも日本の伝統を大事にしようということではなく、和室に凝縮された私たちの生活文化や建築文化の本質は何なのか、そして姿形が変わっても本質が失われず生き生きと未来の文化につながっていくのだろうかという知的関心が沸き起こったのだ」と分析する。「世界遺産的価値」の文言が入った経緯については、本間、服部両氏が「和食にあやかって和室もユネスコの無形文化遺産にできれば素晴らしい」と、意見が一致したことが発端であることを紹介し、「和室を知れば知るほど、この目標は達成できるとの思いが強まっている」とした。

基調講演した藤田氏は、22年にオンラインで養老孟司東大名誉教授と対談したことに触れて、養老氏から昆虫の標本づくりには和室が適していることや、洋室の合理性、経済性は身体や生活にとって必ずしも良くないこととする興味深い指摘があったことを紹介した。藤田氏が研究してきた和室の歴史について養老氏が強い関心を示したのは、和室で構成される日本住宅は日本人の振る舞いが建築化したものであったという点だったと話した。

この後、藤田氏も参加して、内田青蔵神奈川大教授をモデレーターに、上西明上西建築都市設計事務所代表、桐浴邦夫京都建築専門学校副校長、岡絵理子関西大教授によるパネルディスカッション「和室とは何か？　それは未来に失われてしまうのか？」を開いた。

上西氏は「インターフェース（境界）がすごく大事だと思っていて、和室は障子などのインターフェースの違いによって閉じ方の度合いにいろんなレパートリーがあるのが豊かさを生んでいるのだと思う」と述べた。養老氏の発言として、和室は食事をしたり、寝たり、仕事をしたり、何でも包むことのできる風呂敷のような緩さがあると指摘した。リモートの仕事が現実的になり自然の多い地方への移住が和室を考えることとリンクするのではないかとも話した。

岡氏は「結納というのは数十年前は自宅の和室でやっていたが、今はホテルなどでしている。床の間はあるが母親の服が掛かっていたり、きれいな食器を飾っていたりして、随分と考え方が変わってきている。日本文化の変化だと思う」などと述べた。

桐浴氏は「京都では若い人たちが町屋を借りて和室に住もうとしていたり、私の知人の建築家が設計したスターバックスが和室だったりする。機能的なものの中に、例えば壁に子どもの絵を掛けるとか、気に入ったものを飾るなど、少しでいいのだが、そういう考えが和室につながっていくのではないか」と持論を披露した。

藤田氏は「機能的でいいという時代はもう終わったと思う。今はむしろ機能的ではないものが大事で、その時にこれまで和室が与えてくれたものをもう一度考えることが必要だ。私は今そういうところで暮らしていて幸せだ」と語った。

内田氏は「和室の空間性や自然との関係性がわれわれの一つの美学であり、和室を考える時には、それが重要になると思う。和室の魅力をあえて言うと、機能性に相反する曖昧性や融通性ということになるだろうか」と総括した。

服部氏は全体のまとめとして、「和室は、日本の中で独自に成立し展開した部屋となる。いすなどではなく床に座る（床座）、畳の敷き詰められた部屋で、日本の生活文化や建築文化が凝縮した存在と言える。和室を知らない若い学生にも和室の心理が存在している。和室のイメージは日本人に共有される歴史的な感性だ。和室が減少する時代にこの心の中に培われた和室の意味をどのように残すかが課題だ」と述べた。

今後の活動として、建築学会の研究活動の一層の発展や、世界無形文化遺産としての和室文化の位置付けを挙げたほか、「現代・和室の会（仮称）」の設立に向けて、近く集会を予定していることを明らかにした。

建設論評

インプット、リテラシー、アウトプット

世の中の動きを知る手段は多種多様に存在する。新聞や雑誌、テレビやラジオなどの伝統的なマスメディアをはじめ情報機器のインターネット、個人放送局ともいわれるＳＮＳ（交流サイト）などに加え、人を介するリアルな接点などもある。事実、目的メディアでもある身近なツールから膨大な情報が瞬時に入手できる。

受け手にとって価値ある中身が〝情報〟だと位置付けている筆者は、情報量が劇的に増加している今日の境遇に感謝する一方、不安も抱く。それは、人間の情報処理能力はこの２００年の間、大幅に変わっていないといわれていることだ。情報処理能力を超えてしまうと意思決定が遅くなり、間違いが発生しやすくなるという。そして、社会が成熟する過程では人間が無能力化し、成熟しないまま生きていける社会が形成されてしまう恐れも指摘される。

情報に関わる周辺の言葉に「インプット（知識や情報の入力）」「リテラシー（活用能力）」「アウトプット（情報の発信）」がある。中身の解説ではなく、本質ともいえるそれぞれの普遍的な考え方をまとめてみた。

まずインプットだが、備わっているアンテナに引っかかる情報の積極的な収集と整理は当然だが、個人で手に入れる知識や経験の質や量はおのずと限界があるだろう。だからさまざまな分野のスペシャリストとの付き合いが重要となる。また、本人自身が発信力や決定力を備えたスペシャリストになれば、人から頼られ人脈も広がり、「規模の経済」のごとく、周りからさまざまな意図ある情報が持ち込まれることとなろう。

リテラシーについては、理解力、想像力、表現力の能力が高まれば、誤った判断を下す場面が減るといわれている。つまり、知識や技能を学び身に付ければ、世の中の仕組みが分かり、他人の考えを読む能力に磨きがかかり、職場などでの発言力も高まる。加えて的確な判断を行うためには情報を集めるだけでなく、その真偽を見極める〝情報の吟味力〟を身に付けることも大事である。ある料理人の話だが、「素材と対話しなさい。肉も野菜も入荷のたびに形は違うし、水分量なども毎日違う。それによって火を入れる時間も変われば、塩の振り方も変わる。素材を見極めてつくり方を変えなければならない」と。

アウトプットだが、皆が見ているものは既に言葉になっているともいわれている。ある女性アナウンサーは「仕事は、１００調べてそのうち一つだけを使うといわれるほど、事前準備が大事」と話す。また、漫談家は「１００の話を思いついて使えるのは一つ」。アウトプット時の根底には次の姿勢が大事だと言える。発信の際には「相手のため」ではなく「相手の立場で考える」。経営者は「ビジネスの王道は相手にとって価値ある情報を提供すること」のほか、「企業の持続的成長に資する効果を有するかどうか」を経営のポイントに挙げる。人間社会では、競争より協力することによって生き延びるケースの方がずっと多い。一人ひとりのパフォーマンスには限界があり、関係者が連携してこそ組織は強くなる。コミュニケーションこそ信頼の「きずな」になると信じている。

（次）

ＺＥＨ・ＺＥＢ標準化

ゼロカーボンロードマップ　今年度から着手

関電不動産開発

関電不動産開発は、これまで取り組んできたゼロカーボンの取り組みを加速化・具体化するため「関電不動産開発ゼロカーボンロードマップ」を策定した。２０２３年度以降に着手する全ての住宅・オフィスビルでＺＥＨ（ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス）・ＺＥＢ（ネット・ゼロ・エネルギー・ビル）を標準仕様化するほか、25年度までにすべての既存物件でも再生可能エネルギーを活用したCO_2フリー電気導入やＬＥＤ照明化を進める。

23年度以降に着手するＺＥＨ・ＺＥＢの標準仕様化については、ＺＥＨ・ＺＥＢともに「ｏｒｉｅｎｔｅｄ」以上、物流施設は「ＺＥＢ　ｒｅａｄｙ」以上の水準を設けた。このほか、新規開発するオフィスビルなどの全物件にCO_2フリー電気を導入する。

25年度までには、全ての既存大型物件にCO_2フリー電気を導入し、既存のオフィスビルと賃貸住宅の照明をＬＥＤ照明化するほか、全ての社用車を電気自動車などに切り替える。

同社は「ゼロカーボンの選択肢を社会に生み出すこと」を重要な使命として捉えている。このため、22年３月に「ゼロカーボンへの取組み」の方針を策定し、30年度までに集合住宅・戸建て住宅のＺＥＨ、オフィスビルのＺＥＢを標準仕様化することを定めていた。今回のロードマップはその取り組みを強化する意思を表した形だ。

20 イタリアの越境的なデザイン

45°の視線

建築史家・建築批評家
五十嵐 太郎

一貫した美しい造形への探求

現在、静岡文化芸術大学が所有するレオナルド・ダ・ヴィンチの理想都市の巨大な木造模型（サイズは3.0×1.7㍍、1950年代に制作されたもの）の展覧会に関わったことがきっかけで、４年ぶりにイタリアを訪れ、調査を行った。よく知られているように、彼は「モナリザ」などの代表作を持つ画家であると同時に、自然や人体を観察し、考察する科学者としても活躍した。さらには機械や乗物、建築や土木、そして都市計画の分野に対しても、さまざまなアイデアを構想した。いわゆるルネサンスの時代における万能の人である。

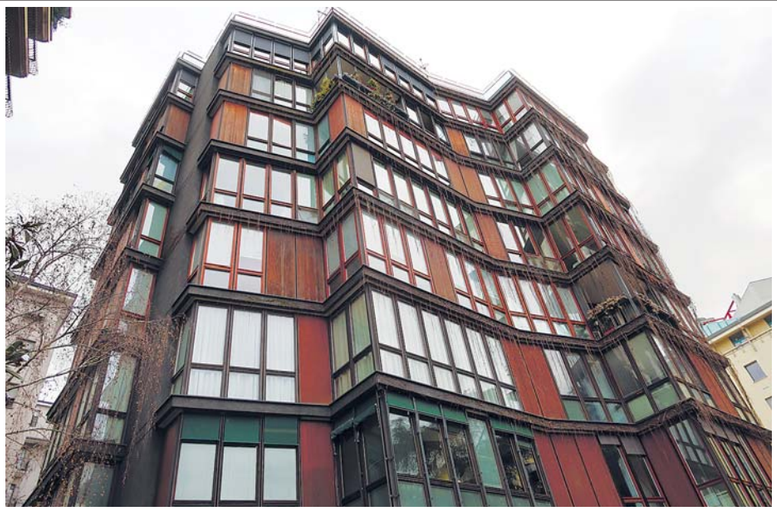
従って、教会や美術館以外でも、トリノの自動車博物館、ミラノのレオナルド記念国立科学技術博物館、マルペンサ空港に隣接する格納庫を利用したヴォランディア飛行機博物館、ヴィジェーヴァノのレオナルディアーナ、出身地であるヴィンチ村の生家や展示施設など、多くの場所を回り、彼の活動を学ぶことができた。もっとも、実はオリジナルの絵や手稿を展示している所は少なく、彼のスケッチに基づく機械や建築の模型など、複製品をベースにした施設が多く、むしろそれらをどう見せるかを工夫している。ともあれ、改めてイタリアという国が、レオナルドを誇りに思っていることがよく分かった。

建築に限定されない、幅広いデザインの活動は、現代のイタリアでも確認できる。例えば、「ガエ・アウレンティ　日本そして世界へ向けた、そのまなざし」展（2022―23年）は、会場となった九段のイタリア文化会館やオルセー美術館のリノベーションを含む、彼女の建築だけでなく、照明や家具などのプロダクト、会場構成、都市計画などの仕事を網羅していた。またジオ・ポンティは、ミラノ駅前のピレリビルのような高層建築を手掛けているが、家具や陶磁器の分野でも業績を残し、さらには雑誌『ドムス』の編集長を努めている。

筆者は、18年にパリの装飾美術館において彼の大回顧展を鑑賞したが、建築がメインというよりは、シームレスに各分野の作品がつながっている印象を受けた。日本のスクラップ・アンド・ビルドと違い、そう簡単には新築をつくれない国だからこそ、建築という職能を持ちながら、ほかの分野のデザインにも越境するのかもしれない。ただし、最近の日本でも、若手の建築家は、新築のチャンスが少ないために、リノベーションやインテリア、家具や会場構成などの仕事も、勝負作として発表するようになった。

今回はちょうどミラノのトリエンナーレ・デザイン美術館において、アンジェロ・マンジャロッティとエットレ・ソットサスの展覧会を開催していた。ともに建築家兼デザイナーとして有名である。特に前者については、レンゾ・ピアノの協力によって、大掛かりな「アンジェロ・マンジャロッティ　構造がかたちをつくるとき」展を行い、食器や家具から彫刻、建築そして土木まで、構造を意識しつつ、美しい造形への探究が一貫していることが示されていた。近年の日本では、強いかたちを忌避する傾向が認められるが、マンジャロッティのデザインへの態度はすがすがしい。そして会場の空間デザインも素晴らしかった。

大いに感銘を受けたため、時間を見つけては、この展覧会で知ったミラノのプロジェクトをいくつか回った。例えば、駅関係の仕事が多く、地下鉄では、レプッブリカ駅（1998年）のＹ字型柱で支えられた大空間とスラブを吊ったポルタ・ヴェネツィア駅（80年代）、そして鉄道では、ロゴレド駅（2009年）の跳ね上がった屋根である。


クアドロンノの集合住宅（1960年）

また、クアドロンノ通りの集合住宅（1960年）は、プレハブながら複雑な平面と魅力的な経年変化によって、今なお美しい。そして郊外のバランザーテの教会（57年）は、近年だいぶ修復され、現代建築のような輝きを放つ。外観は箱だが、内部に入ると、明快な天井の構造と透過性のある皮膜によって、モダニズムでありながら、聖なる空間を実現している。また、意外に外構が豊かなことに驚かされた。